

金光明経の研究 : インド語原典の思想的発展を中心として

著者	日野 慧運
学位授与年月日	2016-10-13
URL	http://doi.org/10.15083/00075366

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 日野慧運

遅くとも五世紀には原型が成立した中期大乘経典の『金光明経』は、1930年代にJ. ノーベルが複数のインド語原典写本と漢語訳およびチベット語訳を基礎としてテキストの原型と言語の特性とを詳細に分析して発表し、さらに今世紀に入ってP. O. シャルヴォエがコータン語訳を踏まえてあらたな校訂と英訳とを提供したことによって、インド仏教文献としての研究基盤が、ほぼ万全なかたちで整えられた。一方、東アジアにおいて伝統的に護国経典として信奉されてきたこの経典は、中国天台以来の分厚い学術的研究の蓄積を有し、その成果につづくかたちで日本に多くの思想研究が積み上げられている。本論文は、これら二つの流れの研究を詳細に検証、批判したうえで、三世紀ほどの時間をかけて持続された『金光明経』の編纂過程を明らかにし、なぞに包まれた大乘経典の編纂事情の解明を大きく進めた画期的な研究である。

論文は、金光明経の校訂批判研究史と思想研究史を詳細に洗い直した序章、四天王品、弁天品、吉祥天品、地神品、散脂品という諸天に関する五章、それにつづく正論品、善集品、鬼神品という、本経後半部の骨格を構成する八章のそれぞれの特徴と相互関係をその歴史的背景とともに解明した第一章、経典全体にわたって対告衆として登場するルチラケートウの役割とボーディサットヴァ・クラデーヴァターの変容を分析し本経典の編纂手法を論じた第二章、翻訳者である義浄による増広が疑われてきた除病品をインド医学知識伝承の系統の相違と翻訳方法の詳細な検討によってインド起源であることを立証した第三章、および全体を総括する結論とからなる。

これら各章の考察を通して本論文は、大乘経典の宣説者とみられるダルマバーナカの出現に至る説法師の歴史的変遷の詳細、ヒンドゥー儀礼の経典内部における再構造化と神々の秩序の仏教的再編の手法、対告衆の微細な点の変容とプロット展開の転換との不分離な関係など、大乘経典の編纂方法の解明にとってきわめて重要な諸課題を提示しつつ明らかにした。分析は鋭く、論述は明快で、説得力に富む。ことに大乘経典の成立にとって鍵をにぎるダルマバーナカが存在と初期経典伝承者の関係にはじめて統一した見通しを示したこと、儀礼執行者と神々と世界とテキストと説法者の関係構造をはじめ明確に提示しえたことは、本経典の歴史的編纂過程と思想的特徴とを同時に解明した成果として、高く評価される。細部に入れば今後のさらなる調査に期待されるべきテーマが残ってはいるものの、本論文が大乘経典研究の進展に与える影響は大なるものがある。以上の理由をもって、本審査委員会は、本論文を博士(文学)の学位を授与するにふさわしいものと判断する。